



BINGO カードは、単純に単語を英語で言って、カルタ取りゲームをするのに役立ちますが、その名の通り、ビンゴをして遊べるように作られています。

子どもたちが既に知っている英語の単語の中から、特に身近にあるものを、陸上で見かける動物、海中を住処とする動物、食べ物、果物、衣服、食器類、家具・道具類、職業、乗り物、自然の 11 のジャンルから選びました。そして 11 のジャンルを green, pink, blue, dark blue, yellow, yellow green, orange, red, gray, brown, purple のように子どもが言えたり聞き取れる色で縁取りをしました。Take out the green cards.(詳しく言えば、Take out the cards with green frames.でしょうか)と言うと、直ぐに取り出せるようにしたのです。そうするとジャンル別に語彙を確認したりするゲームをする時に、子どもでも手早く選び出せるからでした。

各ジャンルには 9 個の単語を選びましたから、9 枚ずつのカードがあり、3×3 でビンゴができます。指導者が言う単語を聞き取って、そのカードを裏返していく、というルールで、ビンゴゲームを行います。3×3 のビンゴは実にあっけなくビンゴになり、皆幸せな顔をしています。ところが、単語を聞き取った時にカードを裏返すと、裏面にはその単語の綴りが書いてあります。授業を始めたばかりの文字に全く関心がないころは、これはカードの汚れか単なる模様でしかありません。それでも 9 枚の位置は覚えているらしく、裏返っているカードでビンゴを続けると、ちらっとひっくり返してイラストを確かめたりしながら、どのカードかを正しく当てて裏返し、“リーチ！” “ビンゴ！” と叫んでいます。ビンゴが授業の目的ではなく、英語を聞き取り素早く作業をすることで、英語を聞き続ける力をつけるのが目的ですから、枚数を増やすことはありません。

子どもたちの様子をよく観察していると、2 度目に裏返す時に、いつの間にか単語を読んでいます。綴りをきちんと見分けているのではなく、長い単語・短い単語と、綴りの字数が多いか少ないかで判断をしていることが多く、もう少し文字に慣れてくると、最初の音を聞き分けて、“Penguin!” と言うと p で始まる綴りの単語を探したり、それなりのストラテジーを考え出しています。

このような子どもが習熟していく様子を見つけても、敢えて文字を読み上げさせたり、綴りのルールを説明したりせず、そのままビンゴやカルタ取りを続けていると、あっという間に絵のある面だけでなく、綴りのある方でも十分遊べるようになります。この時に、子どもたちは単語のすべての文字を意識しているとは思えません。いくつかの文字が連なっているその文字の高低など全体の形を見て、勘を働かせているようです。これは私たち大人が母語である日本語の文章を読んでいるときに、漢字を見ていちいち声に出したりせず、読み進めているときの状態と似ているな、と思います。母語であっても、見たこともない漢字に出会ったとき、ヘンやツクリで意味を想像して文脈から内容を理解していく、ということさえあります。カードの裏の文字を見て、子どもが何のカードか判断している、極めて初歩の段階の逞しい学習能力は、私たち大人たちが母語で密かにやっているストラテジーとそっくりです。これが、後々フォニックスのルールを類推して発見する力の基盤になっている、と思われまます。子どもたちが自分で考えて知識を得ようとする逞しさを育てるのに、このささやかなカードゲームも一役買っているのではないのでしょうか。